

浄土

1984-9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日 選録者（特別授受承認雑誌）第三二五号
昭和五十九年八月二十五日印刷
九月号
第五十卷



一月一句

決意込め後の彼岸の墓参り

秋のお彼岸の頃になると、夏バテの不充分な体調もなんとか回復してくる。澄み切った感觸の秋風秋氣が、五体に快い。ともかく、こうして健やかな秋の氣配に身と心を休ませることのできるのは、いかにも幸せなことである。

南無秋の彼岸の入日赤々と 宮部寸七翁

どんな心模様の時であろうと、おのずから彼岸の中日の真紅の入日日には頭が下がる。両の手を合わせ、思わず念仏の十唱を唱えてしまうのも、自然のおごそかな営みに改めて感謝するからにはかならない。というよりは、入日日に象徴されるあらゆる恩恵に浴して、今、みずからのささやかないのちが生かされてある「ありがたさ」に、心

から感動するのである。

「健康に氣をつけて、精一杯頑張ろう!!」と決意を新たにするのも、ひとえに秋の涼風による身心の快い高ぶりだけのせいでもあるまい。一時の心の思い入れとか、その場つなぎの浅はかな行動では、この慌しい時代には生きて行けないような氣がする。いや、賜わりしいのちを生かさせてはいただけないであろう。健康な心身を、健全な日々のなしわざの中にひとつひとつ生かして行かなくてはならない。やはり私は、合掌して、「南無阿弥陀仏」とまずは念仏させていただくのである。

暮るるまで山は晴れたり秋彼岸 石井不息

西方極樂浄土のみほとけを心より礼拝して、はるかに入り日の方を偲ぶ。

(勝崎裕彦)

九月号



もし三塗勤苦の処にありて、此の
光明を見たてまつれば、みな休息
を得て、また苦悩なし。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

法 話

いのち尊し(一)……………成 田 光 俊……(2)
——拒めないもの——

浄土宗のハワイ開教(一)……………新 保 義 道 ……(8)

《世相評談》

日本人の宗教心……………大 室 了 皓……(12)
短 歌……………神 谷 花 江……(20)

＜連載＞身体現象学シリーズ②

「顔」と「面」— 2 —……………佐 竹 隆 三……(21)

寄 稿

永遠の課題……………吉 田 勇之助……(18)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第3回 ……………寺 内 大 吉……(35)
前章・絶唱の経典 (三)……………挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)

＜表紙裏＞一月一句「決意込め後の彼岸の墓参り」

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

いのち尊し (二)

—拒めないもの—

“先立てし

人はいずれと

いま問えば

弥陀の蓮華で

笑顔みせるる”

先日、可愛い赤ちゃんが二人も訪ねてこられました。一人は逆児で、お母さんを悩ませ苦しめた末に生まれた赤ちゃんです。も

なり
成田 光俊

(横須賀市専福寺住職)

う一人の赤ちゃんは、お兄ちゃんを亡くしています。

子に恵まれたもののお母さんの体質の関係で流産されました。悲しみの中で小さなつぼを納めた時“なんとかして赤ちゃんがほしい”と、私に切実に語ってから三年近くなります。それでは“子育て呑竜さんを拝みなさい”という話に、遠くからお参りに来られるたびに安置されている呑竜上人を拝まれる

姿を何度も見ただけでした。それは自分だけでなく、大きな恵みをいただかなくては どうすることも出来ない、そんな気持ちだったので しょう。そのお陰で、無理だといわれながらも再び妊娠されたのです。体質の関係で流産の危険が八割近くもありました。その時の悩み苦しみは当人にしか解らないものだと思います。大切な毎日を送り、やっと無事に出産されたのです。

二人の赤ちゃんは丸々として私の手の中で笑顔を見せてくれました。この尊い生命は誰れがつくったものでもなく、悩み苦しみの中で与えられたものです。

このようにしてせっかく尊い生命を得たわ たしたちですが、いつかこの世の生活を終ら なければならぬ時があるのです。このことは、誰れもが拒むことが出来ない現実でもあるのです。その時はいつ訪れてくるかも解らないのが私たちの姿です。それだけに、出来るなら考えないようにしているのが私たちな

のかも知れません。

今年のお施餓鬼会にお参りに来られたお婆ちゃんが、二日あとに亡くなられました。

このお婆ちゃんはとても元気な方で、亡く なられた日も早く起き、ご近所にお使いに行 かれたそうですが、帰られると急に気分が悪 くなり、ほんの四、五十分で息を引き取られ てしまいました。無常とは申せ、人の命ほど 解らないものではありません。

〃昨日みし 人はいずれと

今日とえは

鳥辺の煙 あだし野の露〃

古人が歌われましたように、きのうは元気 だからといって、今日も元気だという保証は ないのです。人間以外の動物は死を予感する そうですが、わたしたちは拒むことが出来ない 死を予測することは困難です。かりに死の 時が解ったらどうするでしょう。殆んどの方

が、多分おそれおののいてしまうと思います。ガンという不治の病にかかった方に、病名を教えないのもそのためだと思います。

何故わたしたちは、それほどまでにおそれおののくのでしょうか。理由は行き先が解らないからです。

電車、バス、飛行機など、わたしたちがどんな乗物に乗っても安心していられるのは、行き先がはっきりしているからです。必ず目的地に着くと信じているからです。車を運転する時に、前に大きな車が走り見通しが悪いとき、暗いトンネルの中では不安になることがあります。先が見えないとやはり不安になるものです。

大きな恵みを受け、気が付かずに母親たちを悩み苦しませながら、この世に生れさせていただいたわたしたちは、目には見えないけれども、行き先が示された切符をもっているのです。その行き先は、阿弥陀さまがまだ法蔵菩薩さまであられた時に、悩み、苦し

み、悲しまれつつ五劫という長い長い年月をかけておつくりくださいました浄土という楽園なのです。これを理解していただくことは仲々大変なことです。が、不思議に、お念仏を申さしていただきますと解っていただけるようになるのです。目に見えなかった行き先も、だんだんとはっきり見えてきます。

さきほどのお婆ちゃんが亡くなられた時、お集まりになった方々は、*「本当に良い往生でしたね」*と話していただきました。

往生という言葉は、このような時にも使いましたが、反対に*「今度ばかりは往生したよ」*と、困った時などにも良く使います。つねにわたしたちが口にする言葉ですが、本当の意味は「阿弥陀さまがおいでになるお浄土に往き、阿弥陀さまのお話を聴きながらの生活をしつつ、残した方々を導く働きをすること」なのです。形と場所を変えて生きることなのです。

そのためには行き先がはっきりした姿を

知ることが必要です。

「我が心 鏡にうつるものならば

さぞや姿の みにくあるらん」

赤ちゃんの時には頬もやわらかく、可愛い顔をして、無心に乳房を求めています。しかし、誰れに教わるでもなく、自然にむずかるようになり、いつとはなしに、第一、第二……の反抗期を迎えていくのです。わたしたちはこれを成長といって喜んでいきます。しかし人間は生れながらにして、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天界という六道をさまよっている醜い姿をもっているのです。その姿を教えてくれる鏡、光がお念仏なのです。

どんな鏡も暗い所では姿を写してくれません。明るい光を受けてこそ、始めて姿を見せしてくれるのです。心を写し出してくださる光が、無量光というお念仏の光なのです。太陽の光も、文明によってもたらされた電気

も見ることは出来ません。それは感じるだけです。お念仏の無量光という光も、見ることは出来ませんが心に感じることは出来ます。心に感じればこそ、罪深い自分だと懺悔する姿が生まれてもくるのです。

なかには、俺は懺悔するような悪い事をしていない、という人がいられますが、人殺しや盗みという世間的な法を破っていないだけで「盗みせず 人殺さぬを良きにして 我罪なしと 思ふはかなさ」(徳本上人)のお歌に示されたように、知らず知らずのうちに多くの罪をつくり、他人の心も傷つけているのです。

そんな自分に気づき、本当に申し訳ないと懺悔のお念仏をすることによって、自然に心が変わってくるものです。お念仏を申すことによって生き方を転換させ、いままでの生活が変わることが、この世における往生の姿でもあるのです。

拒めることが出来ない死をもったわたした

ちが、死ではない、阿弥陀さまのおいになる浄土の蓮華台で残された方々に笑顔を見ることが出来るのだと確信を得た時に、与えられた尊い人生を有意義に過ごさせていただける活力が生まれてくのです。

世の中にはお金が万能だといって、一にも二にもお金、お金という人がいられます。たしかにこの世の中、お金は大切で、先にも立ちますが、だからといって心配事がないかと言えばそうはいきません。組織が大事というお方もいられますが、苦しみがないとは思えません。学問も大切ですが、それだけで心の悩みは解決することは出来ないのです。元祖さまもご法語の中で、「学問も大切だが、学問だけでなく、信じお念仏を申すことだよ」とお諭しになられているのです。わたしたちが尊い生命を全うするためには信仰が必要なのです。

力の限界をもった、弱い身のわたしたちが限りないお力をもった阿弥陀さまに頼りきつ

て、他人のために、世のために共に生き、力強く活かさせていただくことが、この世に生まれさせていただいたことに感謝してゆく、「いのちの尊さ」なのです。

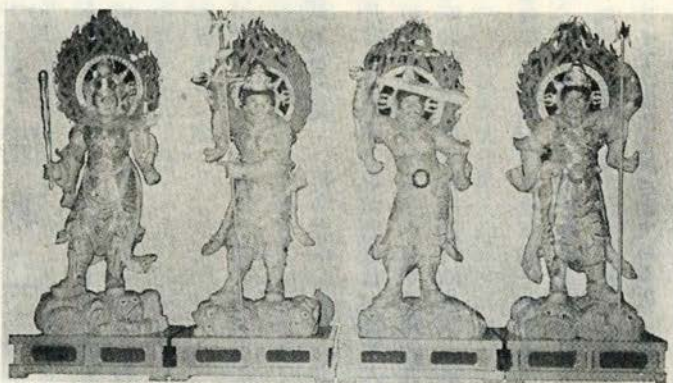
いのちの尊さを知ったわたしたちは、お念仏を申すことによって、もう少し良い人になりたい、人間らしくなりたいとか、有難い人になりたいと思うかも知れませんが、お念仏を申させていただければいたたく程、そのような考えが間違ひであったと解ると思います。一生、どうにもならない人間であったと、教えていただけるのです。どうにもならないこのわたしたちを、「必ず救ってあげるから、充分に、思いきって生きなさいよ」と微笑みを浮かべていられる姿が感じられるのです。

行き先もはっきりした。本当に生かさせていただくとうと、いのちの尊さ、大切さを感じて、みなさんと共に訪ねてくださった赤ちゃんも、人生を歩んでくださるに違いないと思います。

木彫像

—四天王像—

。。。格調高い品性豊かな尊像。。。



多聞天
(北)

増長天
(南)

持国天
(東)

広目天
(西)

材質 楠材・檜材

サイズ 総高さ2尺(生地仕上手彫) 4体一組 48万円

サイズ 総高さ3尺(生地仕上手彫) 4体一組 75万円

◎彩色仕上も承ります。

▶ご一報下さればご相談に応じます。

有限会社 桑田

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

浄土宗のハワイ開教(一)

新保義道
しん ぼ ぎ だう

(前浄土宗ハワイ開教総監)

一 初期ハワイ移民の実態

ハワイでは、既に一九六八年六月常陸宮兩殿下をお迎えして日本人移民百年祭を挙行したが、明年は官約移民百年祭が挙行される予定である。わが浄土宗では本年がハワイ開教九十周年に当り、各種行事が行われる予定となっている。ここで初期ハワイ日本人移民及び草創期に於ける浄土宗の開教について紹介する。

一八二〇年(文政三年)米国伝道会社派、第一回宣教師団十七名がハワイへ来て(以下来布と書く)布教、又文教と併せて近代農耕法を伝えた結果、ハワイの砂糖黍栽培も安定し、一八三五年(天保六年)カワイ島コロアに最初のシュガー・プランテーション・コロア製糖会社が設立され、その後次々とプランテーションが出来た。

(プランテーションというのは、ハワイでは耕地と訳されているが、本来は植民地農場又は栽植植民地、後には植民地の大家農場をプランテーションと呼んでいる。これは先進資本主義国が、熱帯又は亜熱帯地域の原始的農業を高度の技術を用いての資本製第一作(たとえばコーヒー、ココア、ゴム砂糖等)の大農場である。そして低賃金労働者として、現地人や移民が使われ

た。従つて農場監理者や技術者と農場労働者の生活水準には格差が非常に大きい。以下プランテーションを耕地と書く。）

これら砂糖耕地の勞力不足を補う為最初にハワイへ招致したのは中国人苦力であつたが、彼等は頑固で排他的といふことから、その入国を制限するようになり、これに代るものとして日本から労働者を求めるようになった。

日本人最初の移民は一八六八年（慶応四年）五月十六日横浜出帆、同六月十九日ホノルル港入港のサイオート号で来布した一五三人（男一四六人、女五人、子供二人）であつた。同年九月に明治元年と改元されたことから、後に彼等を「元年者」と呼ぶようになった。彼等最初の移民はオアフ島、マウイ島、カワイ島の各プランテーションに配分された。併しこの移民の大部分が農耕に不適な江戸、神奈川の都市生活者であつたことと、農地の労働慣行によつて、彼等の日常は、仕事の面では三十度を越す炎天下の不馴れな十二時間労働、而もその労働時間中は一服休むことも許されず、少し怠けているとルナ（現場監督）に鞭で打たれ、少し位の体の不調は休業の理由とならず叩き起されて野良仕事に追い立てられた。一方生活の方面では月給四ドルで物価高と日本品欠乏で全く苦しい日々であつた。こんなことから苦情百出、絶えず小さな紛争が起り、自殺する者さえあつた。これが日本政府の耳に入り、日本の移民調査使節が来布し、この移民は元年者だけで終っている。併し彼等の実績が日本人移民の価値を証明し、後の官約移民の実現となつた。

アメリカの南北戦争の結果砂糖市場が拡大され、一八六〇年には十二しかなかつた耕地が六年後には三十二に急増、ハワイの労働力は益々不足を告げてきた。その結果外国から農業労働者を導入せざるを得なくなり、ハワイ王朝政府は日本政府に移民を要請した。日本政府はこれを容れ農業移民をハワイへ送ることとし、一八八五年（明治十八年）二月八日第一回船東京市号が成年男子六八二人、成年女子一六四人、子供一〇二人の合計九四六人を乗せてホノルルに到着した。この政府間の契約による移民を「官約移民」と呼んでいる。この官約移民は一八九四年（明治二十七年）六月到着の第二十六回船三池丸に至るまで、男子二三、三四〇人、女子五、七九九人、合

計二九、一三九人であった。

次いで一八九四年（明治二十七年）から一八九九年（明治三十二年）までは「私約移民」と呼ばれ、移民周旋会社が取扱ったもので、この間に二〇、二〇八人が来布している。

これら五万人近い官約、私約移民の実態はというと、入耕直後には移民側にも異常は無く、又雇い主側にも不満は無かった。しかしこの平穩状態は長く続かず、間も無く至るところで小さな波乱と動揺が起った。

耕地では、就労の日が日一日と重なるにつれ労働者にとって予期しなかった苦痛や、約束違ひのことが起き、不平不満の声が高まり、彼等と耕主やルナ（現場監督）との間に色々な悶着が生じた。その直接原因は、雇い主側の契約不履行と、酷使であった。又移民側にも労働に不馴れの者が相当たったこと、言葉が通じないこと、気候不馴れということ等から、不平と誤解がつのつていたのである。ルナがなぐったりすると、労働者はかくし持ったブリキ缶をたたいて急を告げ同僚を集め、一同が鍬などの農具でルナを追い廻すようなことも度々あった。（当時の日本人移民は耕地の野良仕事に出る時には、必ずブリキ缶を携えていったと言う。）結局は苦しい労働に明け暮れる毎日であった。

一方彼等の生活思想は常に浮き草のように動揺を続けていた。その最大の原因は、「金銭を貯蓄し、三年の契約が終ったならば速やかに帰国せよ」（県令〔知事の諭告〕と送り出した日本政府の無定見な出稼ぎ移民政策と、これに応じた移民自身の「いつかは故郷に錦を飾る」という出稼ぎ根情とであった。

従って、まれに期間内に小金を貯めた者は早々に故郷へ引き揚げる。しかし仲々金は貯まるものでは無く、所期の貯蓄の出来ない者が多いが、それでもいつかは故郷に帰れることを念じての消極的な出稼ぎ根性が、長い間若い労働を支配してきた。その為彼等の生活は落ちつかず、素行はおさまらなかつた。そして小金を貯めることに汲々とし、金銭の為には恥も外聞も顧みなかつた。加えて上述の移民の男女差の不均衡と、一部不良分子が調査をごまかして来布していたことから、内的には飲酒、とばく、売笑、婦女売買、刃傷と生活は荒さび、外的には

人種差別、雇い主側による酷使、虐待に喘いでいた。

一九〇〇年（明治三十三年）アメリカがハワイに属領制を布き契約労働制が廃止された。それに伴い契約に束縛されていた日本人労働者は自由の身となった。解放された日本人労働者はこれを契機に思考方法、社会認識、生活態度も変り、半奴隸的待遇の改善を図る労働争議が各地に起き、転住、独立創業、米大陸転向等躍進期の入口へ来た。契約労働が廃止された一九〇〇年から一九〇七年までを自由移民時代と呼び、この間に来布した日本人は六八、三二六人を数えている。

ハワイよりの日本人米大陸転向の激増（約五万七千人に上る）は米西部沿岸の排日運動を惹き起したので、日本政府は一九〇八年（明治四十一年）「紳士協約」を結び、自発的に新しい移民の渡航を禁じた。その結果ハワイ在留日本人の近親者及び写真結婚者のみがアメリカ入国を許された。ここに至って日本人移民のハワイ定住の気運が高まり、又日本から妻を迎える者も多くなった。写真を取りかわして話がまとまれば、日本で入籍させ、三カ月後にハワイに呼び寄せる所謂写真結婚花嫁が一九〇八年（明治四十一年）から一九二四年（大正十三年）七月まで大挙して海を渡った。この十六年間にハワイに入国した女子は三万二千人に達し、その殆んどが写真結婚花嫁であった。花嫁を迎えることによって和やかな新家庭が増加し、荒んだ気風も静まり、個人生活も日本人社会も落ちつき、出稼ぎから一時的定住へ、そして永住土着へと進んだのであった。

以上が、仏教がハワイへ渡来する以前、仏教の開教使が最初に渡来し開教の足がかりを築いた頃、そしてそれに続いて各宗派が各地へ仏教会堂を築いた頃の、ハワイ日本人移民の実態である。

（つづく）

日本人の宗教心

一、ハサミ観音

増上寺の境内に珍しい観音像がある。

聖鉢観音、一名「ハサミ観音」である。数年前に、国際美容協会（山野愛子会長）によって建立されたものである。八月三日をハサミ



大室了皓

（大本山増上寺執事）

の日として、会員たちは使い古した鉢を持ちより、

「長い間、お世話になりました。あなたののおかげで仕事ができました。（家を支えることができました。どうぞ観音さまのおそばで安らかに眠って下さい）」

とハサミ供養の法要をいとなむのである。

西欧人だったら、古い鉄など何の感懐もなく金屑として捨て去ってしまうだろうに、ここでは「物」であるハサミに生命を見出し、その労に感謝して、末永く安隱の場所を与えているのである。

今年の法要には、米国の三大テレビ局の一つであるCBS放送局が綿密な取材をしていた。

彼らには到底理解できない奇妙な行事として映ったのだろう。

八月一日には、電電公社の電気機器謝恩供養法要が行われた。

使えなくなった電気機器等の浄梵供養である。長年にわたって働き続けてくれた機器に感謝をこめての法要である。

近代的な機器であるだけに、西欧人の理解に超えたものに違いない。

筆供養、針供養なども広く行われている。いづれもハサミ供養と同じ心情からのものである。

悉有仏性という教えが、長年の間に人々の心に植えつけられ、それが「物」にも「生命」を与え、生けるものと同じように、これらを大切に取り扱いようになったのであろうか。

「日本人は西欧人よりも宗教心が薄い」と云う人があるけれども、私はそれに対して疑問を抱くのである。

日曜日に教会へ行くことだけで、宗教心の有無を論じているのではなからうが、ハサミなどの供養をみると、日本人は西欧人にはない宗教心を持っているのである。教会へ行く行かないなどは宗教心の一面であって、日常生活の中に、何気なく筆針鉄、電気機器にさえ時には合掌する心ざしがありがたい。ということは殊更、神さま仏さまと口には出さないけれども、広い意味で宗教心のあらわれと思うのである。

ローマには二五〇万人のカトリック教徒がいることになっているが、日曜日のミサに参

加するのはそのうちの三%にも満たないそうである。カトリックの本拠にして、このような状態であるとは、どうしたことだろうか。

日本人は宗教心が薄いという非難は必ずしも正当ではない。むしろ、「ある」とも考えるのである。

日本の家の多くは神棚や仏壇を持っている。そして程度の差はあろうけれども、朝夕、それに向って手を合わせ、心を向ける習慣がある。

彼らの家はどうなっているのか寡聞にして知らないけれども、少くとも、宗教心が薄いといわれて、卑下などする必要はない。

二、食作法

洋画をみていて、食事の場面にはいつも感心させられたものだ。

主人がバイブルの一節を読む。家族もそれ

に合わせて唱和し、食を与えられたことを神に感謝するお祈りをする。

寺であっても、私の家ではこういうお祈りに見合う食作法などしたことがない。ただ「いただきます」と合掌するだけなので、洋画をみては反省させられたのだが、かとい

って、

「さあ、今朝から、食作法をするぞ」などと唐突に始めるのも不自然に思えて、あらたまった時にすればよからうなどと理屈をつけて、ただ「いただきます」なのである。

しかし考えれば、「いただきます」も一つの食作法には違いない。そして私の知る限りの家庭では、必ず「いただきます」「ごちそうさま」をする。全国の小中学校の給食に当ってもこれを欠かすことはない。

「いただきます」とは家のあるじに対していうのではない。なぜなら、あるじも共にいるのであるから。これはあらたまって神仏を意識していなくとも、天地自然の大きな恵

みを、なんとなくではあるが心に感じて、なんとなくではあるが感謝の気持ちをあらわしているものである。

幼児もカトコトまじりでいう。そのように舐られている。

西洋のお祈りの厳肅さには及ばないにしても、これも立派な食作法である。

閑話休題。私は過日、恥かしい思いをした。

増上寺では毎年臨海学園を実施している。小学校三年から中学三年までの子供を一般募集し、伊豆に一週間の合宿をするのである。今年で五十七回目になる。私も数日間お手伝いに参加した。

ここ十年ほどは、稲取の正定寺の保育園をお借りしているが、朝夕の勤行を含めて、宗教的な雰囲気のもとで実施されている。

九時すぎにお寺を出て海へ行き、三時すぎに帰ってくる。従って昼食は海岸で食べることになる。

その日は握り飯が配られた。銀紙を開くと出てきた。大きいのが三つもある。その一つをつまんだ。

そして「いただきます」と私は食べ始めた。ところが様子がおかしい。誰も包みを解かないのだ。不審に思っていると、班長の子供の声がした。

「合掌」

食作法が始まったのである。

「ほんとうに生きたために……」

一同が声を揃えていう。そして、班長の、「同唱十念」でお念仏。終ってみんな声を合わせて「いただきます」と。

私は開いた銀紙をあわてて閉じ、子供と一緒に唱えた。

回りには色あざやかなバラソルが一杯。特にその日の浜は海水浴客で溢れんばかりであったが、その真ん中で、子供たちはお十念を称えたのである。一般の人々は何と思うか、そんなことなど誰も気にかけない。高らかな

「南無阿弥陀仏」という子供の声が浜に影き渡った。

食堂でならともかく、まさか浜では、と決めつけていた私は、子供たちにあわす顔がなかった。

指導者からの指示があつたにしても、子供たちのお十念の声はよどみなく高らかであり、すがすがしい響きをもっていた。

私たちの目前に、若い男女が語らっていたが、この食作法が始まると、そそくさと立ち去って行った。なぜ立ち去って行ったのか解らないが、何か心に響くものがあつたのであろう。

三、亡き母に捧げる銅メダル

ロサンゼルスオリンピックは、史上まれにみる豪華なスケールでさき頃その幕を閉じたが、世界二十五億の人々がテレビで観戦し、

熱烈な声援をおくったという。

若者たちは炎暑のもとにもかかわらず力を競い合い、涙と汗の多くのドラマが展開された。

日本の期待を担ったバレーボール、マラソンは残念であつたが、予想外の好成績をあげたものもある。

シンクロナイズドスイミングがその一つだった。日本選手は見事に銅メダルを獲得して国中を沸かした。元好・木村組である。

その元好選手はメダルを手にして、「亡くなった母のために、今日まで闘ってきました」

と溢れる涙で顔を濡らしていた。

彼女の十二年間のブル生活は母のおかげであつた。しかし母の友子さんは、晴れの日を見ることなく、昨年五月、胃ガンで亡くなっていた。

それから一年以上の苦しい練習に彼女が耐えてこれたのは、この亡き母の支えがあつた

からだという。

彼女にとって、お母さんは人間ではなく仏であつたのではなからうか。生きている生身の母もさることながら、亡くなつてからの母は、それ以上に強い力をもつて支えとなつた。亡き母はもはや人間ではなかつた。人間以上のものとして、彼女は受けとめていたに違いない。

「頑張つて」の言葉はもはや聞けなくとも、それ以上の力強い言葉を彼女は心に聞いていたのだらう。

「この喜びを、最初に報告したいのは亡き母です」

と語つたという。

亡き母への彼女の心情は世俗的なものではなく、宗教的に昇華されたものであつた。まことに、宗教心の厚い人と思わざるを得ないのである。

(了)

村上鉄瑞師著

菊五判 二八九頁
定価 二、〇〇〇円

〒 三〇〇円

法然上人徒然草

所謂作家・学者の著作とは一味も二味も違つたわが法然上人像。一人の青年僧の限りない上人思慕の情念が生んだ労作。特に若き浄土教徒の必読をおすすめします。

自費出版のおすすめ

隨筆・句集・歌集

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理されて、あなたご自身の本を作ってみませんか。小社ではなるべく小経費であなたの本が出来ますよう、ご協力させて頂きます。

東京都千代田区神田須田町二一三十一
有限公司 ルンピニ社

電話〇三一(二五三)

三五二〇
三五二九

永遠の課題

人間は他の生物とちがって死を恐ろしいと感じる。何故なのか。

仏典『ウダーナヴァルガ』の「愛するもの」の中に、

「……どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他人にとってもそれぞれの自己がいとしいのである……」

とある。なにものにもまして愛しいこの自己



よし
だ
吉田 勇之助
ゆうのすけ

を死は奪い去っていくからだ。

死後はどうなるのか。それを知ろうと思っても不可能なことだ。どのような哲学者でも宗教家でも死後の世界のこととはわからない。死んで後に生きかえってくることはあり得ない。死について、いろいろな思索できるのも現世に居る間だけである。

人間は死ぬものであるという確定的なことを忘れようとしても、それは出来ない。

いつ来るのかわからない死というものを見

つめながら生きていくことは、実に大きな苦しみである。

しかし、死が我が身に訪れた後は、もう死への恐怖はないのであらう。死後は一切わからない。生れ出てきた宇宙的大生命のもとの流れに戻っていくからである。

人間界に生を受けたこと、そして人間の師と申し上げるべき釈尊の御教えに接する機会にめぐまれたことは誠に有難いことである。

われわれは深い因縁によって生れ出てきたもので、自分の勝手に生きているのではなく、あらゆるものとかかわりあいではなされているのであることがやっとわかってきた。

法然上人のお詞「法爾の道理」のとおり、自然のうごきはいつも正しく、調和のある世界である。自然には誤りが無い。永遠の世界に帰り赴くまで、常に仏を念じ自然の理法にわが身を委せていきたい。

死ぬ時は、身心に苦痛なく死んでいきたい

と思ってもなかなかそうはいかないものだ。最近、死の判定は脳死によるべきであるとか、いや、心臓死によるべきだという二つの問題がある。長く病床にあって死を迎える場合にその「時」の判定の問題が出てくる。

日本脳波学会による脳死の判定基準は、まことに首肯けるものである。

脳に障害のある大人が深い昏睡で意識が戻らないとか、光に対する反射反応呼吸がなくな、脳波が平たん化し、これ等が六時間以上続く等々、脳死の条件をあげている。

しかし、日本人は長い間、死の判定を心臓死によっている。私も亦、脳死条件には異和感のようなものが残る。

永遠に解き得ない課題である「死」は科学とはちがうので、あくまでも主體的なものとして扱い、確たる自分の死生観を持ちたい。『一紙小消息』の中に、「本願に乗ずることは信心の深きによるべし」とある。迷いを超えた世界を体得したいと仏を念じている。

短
歌

神^{かみ}
谷^や
花^{はな}
江^え

施餓鬼会の読経とよもす本堂の軒をめぐりて五月の雨降る

幾百の赤き小さき風ぐるま水子地藏の秋風にまわる

消罪に程遠けれど一巻の写経終りし夜をやすらぐ

「顔」と「面」——「身体言語」(Leibsprache)に関する基礎的研究・2

佐 隆 三
さ たけ りゅう ぞう

(大正大学教授・医博)

「かお(顔・貌)」は目、口鼻などのある頭部の前面であり、「つら・おもて・おも・めん(面)」などとも呼ばれ、古語では、「かおばせ・かんばせ(顔)」という表現も用いられた。

第二に、比喩的に用いて、物の表面、また、一部だけが外に見えているものを意味する。例えば、「月が雲間から顔を出す」という用法がこれである。

第三に、顔の状態・様子を意味し、このような意味に用いられる場合がもっとも多いのではないかと思われる。

(イ) かおかたち。かおたち。容貌。

(ロ) 表情。顔つき。顔いろ。

(ハ) (比喩的に用いて) 様子。

第四に、成員としての、列座する予定の人、つまりかおぶれを意味する。

第五に、顔は人を見分けられる目立つ部分であるところから、人によく知られていることや社会上の体面の意味に用いられる。

(イ) 人によく知られていることによって得られた信用や評判。

(ロ)体面。面目。名誉。

(ハ)一定の地域や仲間の間で勢力や名望のある人。顔役。

第六に、「五」の数をいう符丁として用いられる（数字の五を人の顔に見たてたものであろうか）。

最後に、接尾語として「——顔」という形で用いられる場面は、そのような表情、または、そのような様子であることの意をあらわす。この場合、多く「が、お」となる。

「かおばせ（顔）」（「かおはせ」とも）は、顔の様子・顔つき・顔色であり、かんばせともいう。

「かんばせ（顔）」（「かおばせ（顔）」の変化した語）といった場合には、次の二つの意味がある。

(1) かおつき。かお。容貌。

(2) 体面。名誉。

「つら（面・顔）」とは顔、おもてのことであり、また、顔つき・表情のことである。後世は、他人の顔をののしつていう場合に用いられ、現代に至っている。

第二に、主に「頼」と表記するが、この場合は顔の両

傍、目の下の部分、つまり「ほお・ほほ（頬）」を意味する。

第三に、ある物の側面、また、それに近接したところや、ある物や場所に面したところ、かたわらの意味に用いる。

第四に、物の表面、おもての意である。

第五に、本当は違う物事を、そうであるかのようにふるまう様子の意に用いられる。

第六、体面・面目・面子（めんづ）を意味する。

「おも（面）」と呼ぶ場合には、次の四つの意味が区別される。

(1) 人の顔。かおつき。おもて。

(2) 表面。うわべ。

(3) 面影。ようす。情景。

(4) （人に合わせる顔の意から）面目。名誉。例えば、「面無し」といった用法。

また、「おもて（面）」と呼んだ場合には「おもて（表）」と同語源で、次の三つの意味が区別される。

(1) 顔。顔面。顔だち。おも。

(2) 顔むけができること。面目。体面。

(3) 顔をかたどったもの。仮面。おもてがた(面形)。めん(面)、また、とくに能面をいう。

「めん(面)」と呼ぶ場合には、次に述べるように、七つの用法がある。

(1) 顔。人の顔。

(2) 顔につけるかぶりもの。

(イ) 特定人物の顔をかたどったもの。伎楽や能楽などで用いられ、多く木製である。

(ロ) 仮装に用いる紙などで作った仮面。

(イ) 剣道や野球などの武術・スポーツで顔をおおう防具をいう。また、剣道では頭部に打撃を加えることもいう。

(3) 物の外側の、ほぼ平らな、一定の広さを持つ部分をさしている。

(イ) 表面。物のおもてまたは外側。

(ロ) 数学で、広がりはあるが厚みはない図形のこと。

平面と曲面。

(イ) 建築上の用語で、角材の稜角を削って作る部分をさしている。柱や天井の棧、格縁(ごうぶち)などに用い、「切り面」、「几帳面」、「唐戸面(からどめ

ん)」などの区別がある。例えば、「面を取る」という用法がこれである。

(4) 顔を合わせること。面接、面会すること。

(5) 紙に書かれた文章。また、その内容。

(6) 「この面」、「他の面」などの形で、事柄や事態の、ある部分、方向をさしている。方面。

隠語。

(イ) 盗人・やくざ・てきや仲間で、顔や人相をいう。

〔日本隠語集〕

(ロ) 盗人仲間で、覆面をいう。〔特殊語百科辞典〕

接尾語としての「面(めん)」は、平面状のものを数えるのに用いる。

(1) 鏡を数えるのに用いる。

(2) 琵琶などの楽器を数えるのに用いる。

(3) 硯(すずり)を数えるのに用いる。

(4) 能面、仮面などを数えるのに用いる。

(5) 碁盤などを数えるのに用いる。

(6) 複数の紙を継ぎ合わせたものなどを数えるのに用いる。

(7) カルタの一组が描かれたものを数えるのに用いる。

(8) テニスやバレーボールのコートを数えるのに用いる。

(一) 接尾語としての「顔」

「——顔」という形で接尾語として用いられるか、あるいはこれに準ずる用法として、形容詞または形容動詞に続いて顔がくるという場合はきわめて多く、四〇〇種以上の表現があることには、ちょっと驚かされる。以下範疇づけを行なつて、詳細に考察することになしよう。

(一) 顔の大きさ・形態に関して

「おおがお(大顔)」・「おおづら(大面)」・「たいめん(大面)」は「こがお(小顔)」に対応するもので、顔のつくりの大きいこと、また、その人を意味する。

しかし、「おおづら(大面)」(「おおつら」とも)という場合には、

- (1) 普通の人より大きい顔という意味の他に、
- (2) 体のわりに大きく見える顔や、
- (3) おとなの顔の意にもいう。

(4) さらに、偉そうな顔つきや態度。

(5) またずうずうしい態度をも意味する。

「こづら(小面)」(「こ」は接頭語)という場合には、「小さな顔」(「小顔」)という意味に用いられることはなく、次の二つの意味を区別する。

(1) 「小面」は単に顔をいやしめていう語であつて、主に、「小面が憎い」・「小面憎い」(顔を見るのみにくらしい。顔を見ただけで何となく癪にさわる。小生意気である)、あるいは、「こづらはげる(小面剣)」(顔の小ぎれいなのを、ののしつていう言葉)などと用いる。

(2) 石や煉瓦などの多面体の面のうちで、もっとも小さい面。

また、前述の「大顔」に関連して、「大きな顔」・「大きな面」という場合には、次に示すように、これとは全く異なった意味に用いられる。

- (1) 無遠慮でいばつた顔つき、態度。
- (2) 悪いことをしながら平気な顔つき、態度をとること。

顔の形態上の特徴を示す表現としては、次に示すように、さまざまなものがある。

1 「なががお(長顔)」・「ながおもて(長面)」(長くほっそりしている顔)

2 「かんびょうづら(干瓢面)」(干瓢を作るユウガホの果実のように細長い形の顔。間延びのした、しまりのない顔)

3 「まるがお(丸顔・円顔)」(丸みのある顔。丸い輪郭の顔。まるがたち)

4 「かくがお(角顔)」(四角ばった感じに見える顔)

5 「じゅうばこづら(重箱面)」(重箱のような四角な顔。角顔)

6 「しゃくしがお(杓子顔)」・「しゃくしづら(杓子面)」(額とあごが出て、中央のくぼんだ顔つき、花王石鹸のトレード・マークに似ているところから、現代ではこのような顔を評して「花王石鹸」などとも言い、若干の軽蔑の意をこめて用いられることが多い)

7 「ひらがお(平顔)」(平面的な顔、のっぺりとした顔)・

「ひらづら(平面)」(幅が広く、起伏の少ない平板な顔。

平たい顔)・「ひらおもて(平面)」(凹凸のない顔つき。

平たい顔つき)

8 「ばんだいづら(盤台面)」(盤台に似た平たくて大きな

顔をあざけていう語)

9 「ほそがお(細顔)」・「ほそおもて(細面)」(ほっそりした顔。面長の顔。瓜実顔。但し、細面という場合に限って、幅の狭いことを意味し、「細面の扇」などの用法がある)

10 「やせがお(瘦顔)」(痩せた顔。頬肉などの落ちて骨ばった顔)・「やせづら(瘦面・瘠面)」(痩せた顔。また、その顔をあざけていう語)・「やせおもて(瘦面・瘠面)」(やせた顔。やせた顔のかたち)。

これに関連して、「瘦顔を張る」「やせがまん(瘦我慢)を張る」に同じ、「浪人の瘦顔張り」(弱い者がひがみ根生を出して、意地を張ることのたとえ)、「おもやせる(面瘦)」(やせて顔つきが変わる。顔がやつれる)、「おもやつれ(面鑊)」(病氣や疲れなどのため、顔がやせ衰えること。また、以前よりも顔がやせ衰えて見えること)などの語がある。

11 「ふとおもて(太面)」(どちらかというとふとった顔)・

「ふとつづら(太面)」(ふてぶてしい顔や態度。また、そのような人)

12 「ふくれがお(脹顔)」(二つの意味があり、(1)ふくらん

だ顔つき。まるまると肥えた顔つき。(2)「ふくれつつら(脹面)に同じ」、「ふくれつつら・ふくれづら(脹面)」(頬をふくらました顔つき。不機嫌な顔つき。怒ってむっとした顔つき。また、その顔)、「おもふくら(面脹)」「おもふくら」ともいう。顔がまるく肥えて、頬が豊かなさま。面ふくらか。

これに関連して、「おもぼる(面腫)」「おもはる」ともいう。顔が腫れる。顔がむくんだようになる。「たかつら(高面・面腫)」「高く盛りあがっている頬。また、頬の盛り上がったところ。また、転じて、頬」、「はれめん(腫面)」「(雅楽の舞楽で舞人が着ける面の一つ。この舞の舞人が着けるはれぼったい面持の面のこと)などの語がある。

前述の「長面」に関連して「おもなが(面長)」という言葉があるが、次に示すように、これには三つの異なった意味がある。

- (1) 顔が長めなこと。また、その顔。
- (2) 態度や気持が悠長なこと。また、そのさま。気長きながのんびり。寛大。
- (3) お人よしであること。まぬけなこと。気がきかない

こと。また、そのさま。

「めんちょう(面長)」には、次の二つの異なった意味がある。

- (1) 顔面の長さ。また、長い顔。おもなが。

(2) 「面」は朝鮮の郡県の下にある自治的共同体の組織で、いくつかの里を合わせたもの

(イ) 朝鮮の李朝時代に設けられた、面の長。里正などともいう。

(ロ) 日韓併合後、朝鮮総督府下に置かれた地方官の一つ。地方行政の最下級機関として、李朝以来の末端行政区画である面の行政事務を執行した。

短い顔のたとえにいう言葉として、「狎ぢんの顔へあげをしたよう」というユーモラスな特殊な表現があるが、長い顔に対応するような「短かい顔」という表現がないのは、不思議な気がする。猫に似て短い顔やそのような人という「ねこづら(猫面)・「ねこおもて(猫面)」という言葉があるに過ぎない。

- また、「丸顔まるがお・円顔まるがお」に関連する言葉として、
- (1) 「まるがおづくり(丸顔作)」(顔の形が丸みを持っていること)

(2)「まるがおで(丸顔出)」(愛嬌のある丸みを帯びた顔をしていること)

などがある。

「角顔^{かくがほ}」に関連して、「ほうめん(方面)」という言葉があるが、次の三つの意味が区別される。

(1)ある方向の地域。

(2)ある分野。

(3)角ばった顔。

(二)顔と色・顔色について

ここで「かおいろ(顔色)」として考察するのは、単純に「顔の色あい」や「血色」のことであって、「かおいろを窺う」・「かおいろを見る」・「かおいろを読む」(相手の顔の様子によってその心の動きを察する)などの用法におけるような「感情の動きの表われた顔の様子」、「かおつき」、「かおばせ」の意味においてはではない。これについては、項を改めて別に考察することにする。

「いろかお(色顔)」とは、「顔に現われた人の心情」であり、「顔の様子から察せられる心のうち」である。

顔色(かおいろ・がんしょく)と同じである。

「がんしょく(顔面)」には、次の二つの意味がある。顔の色あい。血色。かおいろ。

(2)心情の変化が現われた顔の様子。かおいろ。かおつき。かおばせ。

「顔色^{がんしょく}」に関しては、次のような表現・用法がよく用いられる。

(1)「がんしょく無し」・「がんしょくを失う」(恐れ、驚き、羞恥などのために平常の顔色が失われる。顔の色が青くなる。また、相手に圧倒されて元気がなくなる。手も足も出なくなる)

(2)「がんしょくを窺う^{うかが}」(相手の顔の様子によってその心の動きを知ろうとする。相手のきげんのよしあしを見る。かおいろを窺う)

(3)「がんしょくを犯す」(相手の顔色が変わるのもかわらずにいさめる。直練する)

「べんしょく(面色)」(「べん」は「面」の漢音)とは、「顔色」、「面相」であり、「めんしょく」ともいう。多く「べんしょくかわる」の形で、驚きや怒りで顔色が変わる意に用いる。

「めんしょく(面色)」は「かおいろ」、「顔色」のこと

で、「めんしょく土の如し」(顔の色が生氣を失って青ざめることにいう語)という表現がよく用いられる。

面と色とをひっくり返えした「しきめん(色面)」という言葉があるが、これは、色を塗られた面のことである。明確な輪郭によって、他の面、または面の部分と区別された、同一色の面の部分であり、美術作品などについていう。

なお、「顔色」を意味する語として、「かおけしき(顔気色)」「(顔の様子。かおいろ。表情)」、「かおね(顔色)」「(顔の色つや。顔の様子。表情。かおいろ。がんしょく)」、「かおもと」(方言。病人などの顔つき。顔色。「先日よりよほどかおもとがいい」などの形で用いられる。静岡県榛原郡。兵庫県赤穂郡矢野)などがある。

「あかがお(赤顔)」「(赤みを帯びた顔色。また、その人。あからがお)」、「せきがん(赤顔)」、「あからがお(赤顔・緒顔)」、「たがん(緒顔)」「(緒は顔が赤くなるの意で、顔を赤くすること。まっかになること。また、転じて、恥じ入ること。赤面)」、「こうがん(紅顔)」「(年若く血色のよい顔。紅色の美しい容貌)」、「しゃがん(緒顔)」、「もみじがお(紅葉顔)」「(酒に酔った赤い顔)」、「しゅがん(朱顔)」「(1)赤い顔。

酒を飲んだときのようなあからがお。(2)若々しくて色つやのよい顔。紅顔)、「しゃめん(緒面)」「(顔を赤らめること。また、その顔。赤づら。しゃがん)など、赤い色の顔には微妙なニュアンスの異なるさまざまな顔がある。

しかし、「あかづら(赤面・緒面)」、「あかつつら(赤面・緒面)」という場合には、次の三つ(方言を含めて五つ)の異なった意味がある。

(1)赤い顔。赤銅色をした顔。多くは、人をののしっている。

(2)歌舞伎の化粧法の一つ。強烈な性格表現のため顔を赤く塗ること。近世初期、江戸歌舞伎では立役、京阪歌舞伎では敵役を意味したが、中期以降、敵役に統一された。

(3)銅貨をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

なお、方言としては、次の二つの異なった意味に用いられる。

(1)猿。おもに忌み詞。《あかつつら》新潟県北魚沼郡湯の谷。長野県上水内郡戸隠。《あかつつら》福島県西会津郡

(2)えごのき。《あかつつら》秋田県。山形県。《あかちゃ》青森県北津軽郡。岩手県。

「せきめん(赤面)」には、次の三つの用法がある。

(1) 赤い顔。赤ら顔。朱顔。

(2) (赤面する) 何かの原因で顔が紅潮すること。

(イ) 恥ずかしさのために顔が赤くなこと。また、その顔をいう。

(ロ) 喜び、悲しみ、怒りなどで興奮して顔を赤くすること。また、その顔。

(3) 恥をかくこと。また、恥。不名誉。恥辱。

「ひづら(火面)」とは、興奮などで赤くなった顔をいう。多く「ひづらを張る」(意地を張って、互いに真っ赤になつて争う。我意を通す)の形で用いる。

「つらび(面火)」とは本来「つらあかり(面明・面燈火)」のことで、昔の歌舞伎芝居で、夜間、役者の顔をよく見せるため、長い柄のついた燭台に蠟燭をつけてその面を照らし出したもので、「つらろうそく(面蠟燭)」、「さしだし」などとも言った。

しかし、方言として、「つらびが燃ゆる」という場合には、「非常に恥ずかしい思いをする」、「真赤になって恥ずかしがる」の意に用いられる(熊本県。大分県宇佐郡長洲)。

「かおから火が出る」・「つらから火が出る」・「おもてを赤む」・「おもて熱る」などは「恥ずかしくて顔がまっかになる」・「すっかり恥じ入る」といった場合に用いられるが、「おもてり・おむひてり(面火照)」、「おもてる(面火照・面熱)」という場合には次の二つの意味が区別される。

(1) 顔が赤くはてる。怒りの色をあらわす。

(2) 恥じ入って顔を赤らめる。赤面する。

「あおい顔」とは、青白い色をした顔で、多く衰弱、恐怖、心配の時のさまである。「そうがん(蒼顔)」も青白い顔のことであるが、一般に白髪と対で「白髪蒼顔」の形で用いられることが多く、老人の青白く血色の悪い顔をいう。

「つらじろ(面白・頬白)」(はがおが白いこと。顔面が白いこと)とは異って、「はくめん(白面)」には、次の四つの意味がある。

(1) 素顔。

(2) 顔色の白いこと。色白の顔。

(3) (2)の意味から転じて) 公家などの貴人。

(4) 年少で未熟なこと。

「しらふ（白面・素面）」は、酒を飲んでいない平常の状態、また、その顔つきであるが、「すめん（素面）」には、次の三つの意味がある。

(1)化粧しない、本来のままの顔。すがお（素顔）。

(2)能や剣道などで、面をかぶらないこと。ひためん（直面）。

(3)酒を飲んでいないときの顔。転じて、酒に酔っていないこと。しらふ。すめ。

「すめ（素面・素目）」にも二つの意味がある。

(1)酒を飲んでいないこと。酒に酔っていないこと。しらふ。すめん。

(2)ふつうの状態。あたりまえ。ぶじ。尋常。

「しろつら（白面）」は、歌舞伎の化粧法の一つで、顔を白く塗るものである。現在では、「赤面」の敵役に対し、正義を表現する立役の化粧をいうことが多い。古くは、顔に何も塗らないで、単独に正義を表現し、荒事を演ずる勇者をいうこともあった。「しろつら」とも「白塗り」ともいう。

「白面」に対応する唯一の対語は「こくめん（黒面）」で、黒い顔のことである。

「おもしろ（面白）」には、(1)（形容詞「おもしろい」の語幹）おもしろいこと。多く感動表現に用いる。「おもて白」の意味と、(2)（形容動詞）おもしろいさま。興趣の感じられるさまとの二つの意味がある。

「おもしろい（面白）」には、次に示すように、五つの意味が区別される。

(1)見て楽しい。愉快だ。気持がいい。

(2)興味がある。興味ぶかい。

(3)趣がある。風流である。風情がある。

(4)望ましい状態である。思うとおりである。

(5)こっけいである。おかしい。一風変わっている。

現代では用いられることはないが、お「もくろい（面黒）」という興味ある言葉がある。次に示すように、二つの意味がある。（江戸時代の職人・通人ことば）

(1)「おもしろい」をしゃれていった語。

(2)「おもしろい」の反対の意「つまらない」をしゃれていった語。

「おもしろがる（面白）」（「がる」は接尾語）には、次の三つの意味がある。

(1)おもしろく感じている様子を態度に表わす。

(2)ある人に愛情または欲情を感じる(日葡辞書)。

(3)うれしがる。

「おもしろずく(面白尽)」には、次の二つの意味がある。

(1)おもしろみの限りを尽くすこと。おもしろみのきわめて多いこと。「面白尽くし」ともいう。

(2)(形容動詞)おもしろさにまかせてすること。興味にひかれてすること。興味本位。

「おもしろ(面白)」の語を含んだ言葉はかなり多く、次に例挙して考察しよう。

「おもしろの魚田」・「おもしろの田楽」(「鯨の魚田へ魚のでんがく」にかけたしゃれで、おもしろいということ)

「おもしろおかしい」(おもしろく、おかしい。人の気持を愉快にさせるような感じである)

「おもしろおとこ(面白男)」(滑をつくす男の意から、^{おもしろ}相間。たいこもち)

「おもしろこそで(面白小袖)」(伊達者などが着る、奇抜で、おもしろい模様を染めぬいた小袖)

「おもしろさけ(面白酒)」(おもしろおかしく飲む酒。楽しんで酒を飲むこと)

「おもしろじぶん(面白時分)」(趣のある時期)

「おもしろだぬき(面白狸)」(「おもしろい」にしゃれて狸をそえた語)

「おもしろだぬきの腹鼓」・「おもしろだぬきの腹鼓」(「たいへんおもしろい」意をたわむれていう表現)

「おもしろてい(面白体)」・「おもしろよう(面白様)」(歌学で、一首または一句の趣向や表現、感覚などが新しく、

珍しくて、おもしろいと感じさせるような歌、または句。定家の和歌十体の一つ。例えば、「うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを」源 俊賴V」など)

「おもしろな(面白名)」(芝居がおもしろいという評判。好評)

「おもしろばなし(面白話)」(おもしろい話。笑話)

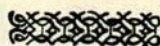
「おもしろはんぶん(面白半分)」(半ばおもしろいという気持であるさま。興味本位の気持を相当に持っているさま)

「おもしろぶし(面白節)」(はやしことばに「この面白や」とあるところから、幕末から明治初期にかけて流行した俗謡)

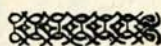
「おもしろみ(面白味)」(形容詞「おもしろい」の語幹に接尾語「み」の付いたもので、おもしろいこと。また、その度合。転じて、おもしろさのあじわい)

(つづく)

浄土句集



一田牛 畝選



熊本 山崎 石庭
十薬を蔭干しにして尼は留守

福岡 行正一如子

福岡 上滝津弥音

眼帯を脱れば御山の月涼し

油山登る観音著我明かり

評 眼の手術をして眼帯をしている時は何も見えないが、経過もよく眼帯を脱れば全盲で何も見えなかったが、よく見えるようになった。ありがたいことである。お月様もはつきり拝むことが出来て、心も涼しさを覚ゆる。

評 油山は浄土宗第二祖鎮西国師が比叡山より帰られて、三十才にて学頭となられ所で観音霊場として有名。その近くに国師の記念碑が高々と建っている。登り坂の左右は著我明かりで楽しい。

東京 真野 竜
秋蟬の調べにうかと更けし夜

東京 小笠原香祥
浴衣着て児等かしこまる夕餉かな

福岡 服部 光代
手作と云えと新茶のよき香り

面とれば若い男の獅子神楽

山梨 青山富貴江

湯治して絞り浴衣に安らぎを

東京 末常てる子

山口 上野 明達
無縁塔開眼供養梅雨晴間

評 面をしている時は若いのか、老人であるのかまったく不明である。面をとると、獅子神楽の人は、若い立派な男であった。

評 温泉からあがって、絞りの浴衣を召せば、身も心も安らぎを覚えられしことならん。湯治もよいが、絞り浴衣とはことさらである。

福岡 林 澄山
御法主のまなこ涼しく御退院

った。

熊本 山崎 松子

雲白し梅雨夕晴れて鳥近く

東京 真野よし子
端居してテレビの声を聞きにけり

群馬 島津 か寿
万緑に立ちて合掌磨崖仏

福島 秋葉 淳

よき目覚め風鈴の早や鳴つていし

東京 栗原やえ子
紫陽花の宵闇はのか花あかり

神奈川 鈴木美智子
若落や地藏に六ツ銭を置く

東京 細田 初枝

未知を飛ぶ蒲公英の絮何処まで

福岡 荒牧 亀齡
退院の体を忘れ草をとる

山形 松田 光蒼
飴ひとつ供え日蔭の水子仏

三重 山田 歌甫

大和路や野辺の香りの蓬餅

東京 吉田ゆきゑ
馴れぬ娘の作りし茄子の濃紫

長野 友渕旋風子
ガス水道バルブ開けば明け易し

東京 岩沢 正義

閻魔堂朽ちたる椽に落し文

山口 三井 寛静
故郷の山並墓地も青嵐

東京 野本 知子
大寺の静けさにいて春惜しむ

福岡 荒牧 還愚

お遍路の長き読経若葉風

千葉 須田 牧草
咲きこぼる山吹掃いてかへりみる

福岡 江上 樺村
御僧の手持ち無沙汰に藤椅子に

東京 田中 秀代

梅雨晴間中仙道の蕎麦所

神奈川 鈴木美智子
お詣りをすませて彼岸桜かな

京都 岩井 伏水
有難や母の忌ひと日梅雨晴間

東京 野瀬 幸子

睡蓮の一夜眩しき隠れ沼

三重 森 静枝
遠くより夫婦揃うてお彼岸に

一田 牛畝
水澄める総本山の雪舟池

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

立ち止まるな善導

〈3〉

寺内大吉

挿絵・松 濤 達 文

前章・絶唱の經典 (三)

七

朱駒波城の後宮で駱駝夫人——ウルヴァジ

—王妃は身上話を語りながら一枚の古い貨幣を少年サビヤに示してきた。貨幣の表裏両面に刻まれた図柄こそ、自分のすべてである、

とも強調した。

表はギリシヤ戦士風の兜をかぶった男性の横顔で、裏は釈尊の仏法を形象化した法輪だった。横顔の肖像はメナンドロス王で、自分ら一族はこの王直系の末裔である。メナンドロス王は深く仏教に帰依していた。当然、自



分も生まれながらの仏教徒である、と駱駝夫人は語った。

メナンドロス王は紀元前二世紀に現れた英王である。アレクサンドロス大王以来、東方へ進出したギリシャ系の諸王朝の一つ、アフガニスタンを支配したデメトリオス王の王子として生まれた。王位を継承するや彼は版図をさらに東へ拡大しインドの半ばを掌中にした。

しかしメナンドロス王は侵略征服者としてインドに君臨したのではない。地元の王侯たちと緊密に協調し、民治にはギリシャ伝統の知性と自由を重視する政策を実践した。彼はこの東方の国において、知性と自由を軸とした仏教が実在している事実を知った。仏教僧を招いては熱心に問法し、やがて深くこの教えに帰依するようになった。

インドの人々も異邦人のこの王に親しみ、「ミリンダ王」と自国語の呼びかたをして敬慕した。彼が西方から侵入した蕃夷サカ族と

の戦いで陣没したとき、インドの民衆は嘆き悲しんで釈尊の入寂時にならって遺骨を分骨し各地に仏塔を建立したほどである。彼が長老ナーガセーナと交わした信仰問答は「ミリンダ王問経」となって現代にまで伝承されている。

いま駱駝夫人が少年サビヤに提示した古銭は、王が在世中に流通させたミリンダ貨幣である。この貨幣は現在でもインド各地や小アジア、さらには英国の南ウエールズからも出土したという。

だがメナンドロス王の理想政治も一代限りだった。いやヘレニズムを基調とした理想を現実化させようとつとめたからこそ権力の座はそれだけ不安定だったのかもしれない。民衆統治には強権が必要なのであろう。王没後のインドや小アジアは大月氏族ら蕃夷の馬蹄に踏みにじられた。なかにはカニシカ王のような崇仏帝も出現したが、すぐに卑小で無知な権力者たちと交替させられた。

インドでは諸王が分立し、小アジアは「青衣の鬼」訶利多種王のような群賊もどきの君主が割拠した。統一国家なぞ望み得ない現状である。

ところで卑小で無知だっただけに「青衣の鬼」訶利多種王は、その王子の配偶者に名門の血を求めた。どこで聞きこんだのか、メナンドロス王の末裔に焦点を絞って探索を開始した。

駱駝夫人の生家はヒンズークシ山塊の麓、東西を旅する隊商の通路、後にシルクロードと呼ばれた峡谷沿いにあった。駱駝を群育しながら隊商宿も営む平和で、つましやかな旧家だった。そこへ突如として青衣の兵士たちが現れた。王妃を迎えに来た、と口上はうやうやしかったが、行動は強権、掠奪そのものだった。有無を言わずに旧家の娘二人を連れ去ったのである。

当初は姉が正妃で駱駝夫人は侍女として仕えた。ところが三人目の子を産んだ先年、姉

は俄かに他界した。正妃の座へ直ることを強制された。

「姉はもう一度、あの崖を見たかったにちがいありません。毎朝、御飯を運んで崖の洞窟へ登ってゆくことを、それは楽しんでいた姉でした」

駱駝夫人は眼をうるませて窓の方を見やっていた。朱駒波城内の朝の空が、ひろがっていたが、窓は小さく空もまたどんよりと曇っていた。いや、晴れていても鴉の群舞で黒くおおわれる街である。涙の水滴で、その閉ざされた空間に限りない視野の拡大を願うかのよう

に。故郷を語る駱駝夫人の声は湿っているにもかかわらず、どこか強い響きをとまなっている。彼女の故郷は断崖に囲まれた峡谷だという。断崖の石壁には無数の洞窟があって、そこに僧や僧もどきの信者が棲みついていた。

自分たちの大崖仏塔と似たものなんだな、と少年サビヤは合点した。とすると、彼女の

故郷も大乘教徒の地であつたのか。

「毎朝、御飯を運ぶんですね。なぜその僧たちは托鉢をしに町へ降りて来ないんですか」

「とても皆さん、忙しいんです。朝早くからお仕事にかかっていらっしゃいます。宿麦の御飯を町の者が、みんなでかわるがわる運んであげるのです」

「何が、そんなに忙がしいんですか。仕事とは何ですか」

「岩を削っていらっしゃいます」

「岩を削って何を？」

「あの石壁を仏さまのお姿に変えるんだそうです」

「崖を仏像に変えてしまうのですか。法輪や菩提樹ではなしに」

「ちゃんとした人間の姿をしたお仏像なんだそうですよ」

釈尊が入滅されたのは紀元前三八三年説が有力であるが、その遺徳をしのんだ仏像は造

立されなかった。仏伝図と言って釈尊の生涯を塑像化した作品が古くからある。しかし周辺の登場人物はリアルに描きながら、かんじんの釈尊御自身だけは象徴化された図柄だった。誕生は蓮華、成道は菩提樹、涅槃は法輪などであらわした。なかには大河の兩岸に人物像を配し、河の中心部に白線一本を引いてそれが「正道を歩く釈尊」という意味をこめたりした。後世の浄土仏で、とりわけ善導が説いた「二河白道」を思わせるものもあった。

こうした象徴仏像が、はっきりと人間の輪郭を描出するようになったのはいつごろからであろうか。近世の発掘などから紀元後二世紀あたりと推定されている。それも遠くインドの西北部、現パキスタンのガンダーラで出土した。崇仏帝カニシカ王紀と時代も場所も符号する。

ところで駱駝夫人が語った故郷とは現アフガニスタンのバミヤンであろうか。

海拔二六〇〇メートルの高陵地が連なり、その底部を峡谷が走った。高陵地は垂直な懸崖をこの峡谷目がけて突きとおした。現存の崖肌には五〇メートルを越える大石仏が刻みこまれている。並んだ小石仏も高さは三六メートルに及ぶ。

ただし石仏の面容や体軀には破損の跡がいちじるしい。これは後年になってこの地域を占拠したイスラム教徒によるものだと言われる。破損以前のバーミヤーンの太石仏については七世紀終盤に訪れた玄奘三蔵の「大唐西域記」が活写している。

——大都城は崖に抛り谷に跨がり、長さは六、七里あり。北は高き巖山を背にす……王城の東北の山阿に立仏の石像ありて、高さは百四、五十尺なり。金色に晃（て）り曜（かがやき）し、宝飾も煩爛たり。東に伽藍あり。この国の先王が建てしところなり。

この国の先王がカニシカ王であったことは言うまでもない。しかしこの大石仏が完成したと推定される四世紀前後、すでにカニシカ王はなく、こんな大工事を起工する外護者はいなくなっていたはずである。ちなみにこの四世紀前後はイラン系のエフタル族とかクシヤーナ族やササン王朝を名乗る部族が入れ替り立ち替り侵入、短期間の支配者となつては追放されたりして、政情はきわめて不安定だったのである。

大石仏の制作者が、岩肌にくり抜かれたおびただしい洞窟に棲む仏教僧やその信徒たちであったことは間違いない。そして周域の住民も協力を惜しまなかったであろう。

八

会話の途中で色黒の大男がのっそり入室してきた。三衣を掛けた沙門だった。駱駝夫人はあらためて紹介することもなく故郷の話を

続ける。

大乘菩薩、竜猛とはこの人だな、とサビヤは緊張した。竜猛がどんな沙門であるか、正体を見抜いてくるのが此処を訪れた目的のだった。

「沙門さま方が棲んでいらっしゃる石窟は、いろんなお部屋があるらしゅうございますよ」

と駱駝夫人はバーミヤーン大石仏周辺の洞窟群について語る。

礼拝所をはじめ僧房、食堂、厨房……すべてが岩ぶところをくりぬいて造られ、しかもそれらは複雑な通路でつながっているという。あたかも石窟要塞で、その外面を大石仏像で覆い尽そうと岩肌を飾削しは始めているのだった。

沙門たちが、カニシカ王が造立した丘上の伽藍に棲まず、洞窟生活を求めたのは必ずしもきびしい寒気をしのぐためばかりではあるまい。襲来する異民族の矛先から教団の結束

を守りぬく意図だったにちがいない。その点はサビヤがいる大崖仏塔の生活とも共通している。

ただ駱駝夫人が列挙した洞窟内の僧房中、サビヤが初めて耳にする房名があった。

——写皮房。

「それは何をする場所でしょうか」

「写皮房ねえ。さあ妾も中まではいりこんだわけではないので……」

壁ぎわに立つ沙門竜猛がはじめて口をひらいた。巨体に似ずものやわらかな声であった。

「写皮房とは、経文を羊皮に写す作業をするところだ」

「経文を羊の皮に写すのですか」

「そうだ。花汁で仏典を羊のなめした皮へ書きつけておく」

今日で言う羊皮紙の写本だった。

経典のすべてを脳裡へ叩きこんでしまいうや方とは全く異なる。文字にして経典を残そ

うとするのである。

「そんなやり方があったのですか」

「梵学を人文に写しかえるのだ。これからの
仏法はそうでなければならぬ」

梵学と人文——インド伝承の暗記方式が梵
学であろうか。この伝承は後世にまで堅持さ
れ波羅門僧は十万章に及ぶヴェーダの内容を
すべて丸暗記だという。それもまともな暗記
ではなお半人前で、末尾から逆さ読みで暗唱
できなければならない。

竜猛に言わせたらそんな暗記能力は特定な
頭脳の持主にのみ可能なのだ。大衆と仏典と
の距離を近接させるためには彼らが知ってい
る文字に写しかえねばならない。くり返し読
むことで理解は深まり、信仰は大衆のものとな
る。

「経典だけではない。仏像もそうだ。人間の
姿で形取ってこそ仏はわれわれに近づいてき
なさる。草や樹では大衆の心をゆさぶらぬわ
い」

「すでに王妃さまがお育ちになった山峽の国
では実践されているわけですね」

「そうだ。おぬしらは部派教団と呼んで権力
に媚びる小乗の徒を軽蔑するが、かんじんの
大衆を救うおぬしら大乘教団が大衆と離れて
いた地点にいたのでは何にもならない。積極
的に仏法を人文化することだ。人間のお姿を
した世尊、誰もが読解できる經典。大崖の仏
塔教団でも即座にこの双方を実現しなければ
ならない」

沙門竜猛は大乘教団の進路を、具体的に指
示するのだった。少年サビヤは長い放浪の旅
から帰ったタバス尊者が何とか現状打開を、
と思いつめていた姿を想起しないわけにはい
かなかった。一刻も早く竜猛の意見を伝えよ
う。

話題が熟しきったとき、あたふたと乳母の
カナウジーが走りこんできた。

「大王が呼びでございます」

「うむ」

「王妃さまも御同席なさいますようにと」

「また、あれか……」

竜猛は駱駝夫人をかえりみて意地悪そうな笑みを浮かべた。

「御病氣が出たんですね」

王妃も笑いながら応じている。

「大王が御病氣？」

サビヤは問い返さずにはおれない。大王と言えは「青衣の鬼」訶利多種王二世のことであらう。いったいどんな病氣が出たというのか。

「持病だよ。いつもあの発作をおこすのだ」

竜猛はこともなげに吐き棄てると、先に立って王妃室を出ていった。だが扉口でいったん立止まり乳母のカナウジを招き、何やら指示を与えた。

「沙門のお部屋へ御案内します。そこに経文が置いてあるそうですから、ゆっくりお読みになるとよろしい」

乳母はサビヤを促して廊下へ出た。石垣を

積み上げた長い廊下だった。しかも道は幾度も折れ曲がって再び王妃の部屋へ戻れそうにもなかった。

俄かに廊下がせばまり、やがて階段に達した。かなり長いその階段を登り詰めると厚い扉があった。沙門竜門の私室は粗末な屋根裏部屋で、天井が窓の部分にまで深く傾斜していた。窓外には狭い空間越しに隣りの建物の石壁が迫った。室内の象を意匠化した漆喰の壁を除けば、此処が沙門の私室——僧房とは思えなかった。

だがサビヤはそんな室内にいつまでもこだわってはいなかった。乳母カナウジが手渡してくれた巻物の経典にすべてが集中した。大きな羊皮紙五枚にべったりと細字が埋められている。サビヤが精通するインド文字、それも西北方の地方語ブラックリット語だった。花汁のインクも読み易かった。

経典はいきなり劇的な場面から書き起こされている。釈尊がクシナ国アリラバッダイ河

のほとり、娑羅双樹の間で二月十五日、涅槃を迎えられて最後の説法をする情景だった。

仏弟子たちは悲しみのなかで聞いたです。

——仏身はどうなるのですか。久遠に消滅してしまふのでしょうか。

釈尊は決然とお答えになる。

——現世の肉身は亡ぶ。しかし正覚の法身は永遠不滅に常住する。

この人格が、正しい意志が消滅することはありません、と断言されるのだ。正法を体現し、それを実践しぬいてきたダルマ(法)の身だからである。それが涅槃である。

未だ後世のように整備されておらず素描だったが、この経典こそ「涅槃経」である。

古来「涅槃経」は大小乗にわかれて伝承されてきた。大乘のそれは釈尊が説いた「正覚の法身」をことに重要視した。この法身が、「一切衆生、悉有仏性」という理念に発展、拡大した。正覚の法身は万人にあてはまるはずである。歴史上の釈尊が人間であれば、仏

性——仏たる人格は、ひとり釈尊の専有物ではない。一切の衆生にも悉く仏性が有る、と主張するのである。

ちなみに小乗系の「涅槃経」は、「灰身滅智」の立場を取っている。この肉体が灰になれば、その智慧もまた消滅する。人格——仏性も失われるというのである。

羊皮紙に写した「涅槃経」は五枚目、最終の章へきた。いや、これはじきにサビヤ自身も気づくのだが「涅槃経」の終章ではなかった。ほぼ半ばに近い第二十巻までだった。

ひとりの人物が登場してくる。

——アジャータタシヤトル。阿闍世王である。

この王が、釈尊滅後にその王舎城へ仏弟子たち五百人を集め、最初の経典を編ませたという歴史上の事実サビヤも知っていた。ところが羊皮紙の終段に描かれた阿闍世像はそんな崇仏帝とは似ても似つかなかったのである。

九

阿闍世王は悪虐の限りを尽くした暴帝だったのである。父王を殺した。生母の韋提希も殺しかけた。

沙羅双樹の林間で静かに息を引き取ろうとなされた釈尊は、突然大衆に向っておっしゃった。

——今、あの男が倒れるのを見た。

——誰ですか、あの男とは？

阿闍世王だ。自分が犯した罪に苦しんでいた。そこへ我が手で殺した父王の頻婆娑羅（ピンバサラ）が現れた。仏に救いを求めよ、と説いた。その言葉を聞いて彼は悶絶してしまった。私はこの王のために、永遠に（無量劫に到るも）涅槃へ入らぬであらう。

迦葉菩薩はびっくりした。

——何をおっしゃるのですか。阿闍世ひとりのために、だいいじなお涅槃をやめられるなんて。あんな悪虐な男のために……お迷いに

なってはいけません。

釈尊は動じなかった。

迷いではない。あの男を救わぬうちは、私は涅槃に入らない。

——世尊が永遠に生き続けられるのは、みんなの願いです。だからすべての衆生のために涅槃へ入るのを中止する、とおっしゃって下さい。あの男ひとりのためになどとおっしゃらないで。

迦葉菩薩の熱望を、釈尊は首を振って退ける。

——いいや、あの男のためだけに、阿闍世ひとりを救うただけに、私は仏としてのすべてを無にしても悔いしない。

少年サビヤは驚きと感動がこもこも胸を圧迫してくるのを、どうすることもできなかった。何という決意であらうか。

それにしてもこの「阿闍世ひとりのためだけに」とは何を意味しているのか。仏陀の生涯を無にしてまで一人の悪人を救おうとす

☆☆

洞
穴



る。この大乘經典は何を訴えようとするのだろうか。

だが五枚の羊皮紙はそこで終っていた。釈尊の迦葉菩薩への説法が「阿闍世のために涅槃へ入らずとは、かくの如き密義を汝にまだ解すること能わず。何を以てのゆえに。わがためと言うは一切凡夫なり。阿闍世とはあまねく一切の五逆を造る者に及ぶ」の文章でぼつきりと切斷されていたのである。

サビヤはあせった。必ずこの文章には続く部分が実在するのであらう。それは何処にあるのか。六枚目の羊皮紙は……サビヤは探がしまわった。どこにもない。

落胆したサビヤの眼に巨象を描いた壁の上隅で漆喰が崩れかけている部分を見つけた。沙門の寝台を引きずって行って、そこに登った。壁の漆喰に手をかけると、ぱっくりと外ずれた。壁の一部と見せかけた秘密口の蓋だったようである。きつと沙門竜猛はだいいじなもののをこの奥に秘匿しているにちがいない。

サビヤは穴へ這いずりこんだ。内部には何もなかったが、這って進めるだけの空間がどこまでも続いていた。しかも進むにつれて通路は広くなった。足もとも石畳で中腰ながら歩くことができた。

どれだけ進んだであらうか。這いこんだ穴が遠い明かりの点ほどになってしまった。そのときサビヤは右手前から泣き叫ぶ声が噴きあがってくるのを聞いた。男だ。それも成人の胸間声だ。

さらに声にひかれて前進すると石畳は切れ、板が張ってある平面へ出た。泣き声はその真下から響いてくる。サビヤはしゃがみこんで板張りの平面を物色した。少し先にはほんのわずかだが光りの洩れる箇所があった。板の隙間で手の平をタテにして挟めるくらいだ。慎重にうつ伏せになり、そこまで這い進んだ。

眼下に広い室内が見渡せる。豪華な家具や調度品が並んでいる。寝台には高価な薄絹が

天井から吊りさがる。その直下にうずくまる男。嗚咽はうちふるえる彼の全身から発しているのだった。

意外なのは男の左右に見知った男女の姿が認められたことだ。沙門竜猛と駱駝夫人ではないか。まるで二人がかりであの男を折檻しているみたいだった。

泣きじゃくりながら男は太い声で何かをしきりに訴える。ようやくサビヤにも声の内容が聞きとれた。

「わしは犯したんだ。母を犯したんだ。この罪は何に値するか。言ってもらいたい。地獄に堕ちれば、どんな地獄なのか」

「どんなやり方で母を犯したか、言ってごらんなさい」

沙門竜猛は冷めたい姿勢だったが言葉には敬意がこもっている。とするとこの男は「青衣の鬼」訶利多種王二世なのだろうか。

男の告白は、後になってサビヤ自身が經典のなかへ採り入れている。それも阿闍世王の

息子の告白とした。

ここではその經典の一節を再録しておくことにする。

——阿闍世王、一童子を生じ優陀夷跋陀羅（ウダイバツダラ）と名付けぬ。この児の陰、虫の喰うところとなり種々の薬を以て治するも差（い）えしむる能わず。児この瘡を患うるを見るがゆえ抱養する者つねに口を以てその陰をふくみ、暖氣にてこれをふくにその痛み少しくいえしかば、しばしばこれをふくんで止む。彼、暖氣を得て便ち不浄を失し、不浄を失するとき虫すなわち精にしたがって出でて、この子是において差ゆるを得て苦痛を除き癒えぬ。これより後つねにこの法を習い、口中に妊を行ずること、かくの如くにしてうたた久しく、いまし女人を強索して口中において妊を行ずるに至れり。その子に母あり。即ちこの念をなさく、「彼これを習うてやまず。つねにまた我れに及ぶべし。よろしくか

ねて方便をなしてこの悪法を止むべし」と。
 ここにおいて母は衣を脱ぎ、面を包みその形
 体を露わにして往いて……

現代流で言うフェラチオに馴染んでしまっ
 たわが子の悪習を中止させるために、母親は
 肉体を提供したというのである。

訶利多種王二世は号泣しながら、この忌ま
 わしい思い出を微に入り細をうがって描写し
 続ける。それを煽動するように訊問を重さね
 る沙門竜猛だった。サビヤはよく理解が届か
 ぬながら首をかしげないではおれない。

この懺悔は造られたものではないのだろうか。
 訶利多種王二世は泣き叫びわが身を責め
 さいなむことでゆがんだ快楽を満喫している
 のではなからうか。

少年のこの漠然とした予感が夜になると現
 実のかたちで裏付けられた。沙門竜門にくれ
 ぐれも羊皮紙の「涅槃経」の続篇を頼んで朱駒
 波城を辞することにした。乳母カナウジに

みちびかれて城門を出たとき、老女はあわて
 てサビヤの袖を引いてかたわらの大樹のかけ
 へ連れこんだ。

「ここには危い。大王が城を出るところ
 です。まごまごすると馬に蹴殺されてしまう」

言葉どおり、サビヤたちがしのび出た城門
 が大きく開かれ十数騎の武人が馬蹄をとどろ
 かして走り去った。

「どこへ行くのですか」

「どこへかねえ。あてなんかないはず。ゆき
 当りばったりで民家を襲い、人間を殺し家を
 焼き払うんですよ」

「でも大王は昼間、罪を悔いて泣きわめいて
 いらっしやいました」

「おや、そんなことをどこで知ったの……あ
 の大王はね。あれをやると、すっかり好い気
 分になって人を殺したくなり、火を放ちたく
 なるんですよ」

老女は疑ぐり深そうな眼で、あらためて少
 年を見つめ直した。

(つづく)

『好評』

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁 定価 三五〇〇円(〒二五〇円)

〔普及版〕B 6判二三五頁 定価二八〇〇円

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

△発売▽

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

振替 東京〇―一九〇〇

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 九月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年八月二十五日 印刷
昭和五十九年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八―八二―一八七番

◇◇竹中信常博士頌寿記念論文集◇◇

宗教文化の諸相

「編集・発行」 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

「体裁」 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇円

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井実成

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拝見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となり、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

● 発 行 ●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

電話〇三(九一八)七三一一番

△発売元 山喜房仏書林▽

第五十巻

九月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年八月二十五日印刷 昭和五十九年九月一日発行